

Richard Rolle の宗教抒情詩における スカンディナヴィア借入語

— MS Longleat 29を中心に —

佐藤 桐子

1

イギリス14世紀の神秘思想家 Richard Rolle (d. 1349) の著作を所収する MS Longleat 29 (以下、Lt 写本) は¹、その校定本の編者である Ogilvie-Thomson の調査によって、15世紀に東中部方言で転写された写本であるとされている²。当時の東中部地域の英語は、Baugh and Cable が、“By the fifteenth century there had come to prevail in the East Midlands a fairly uniform dialect, and the language of London agrees in all important respects with it. ... Even such Northern characteristics as are found in the standard speech seem to have entered by way of these countries” (2002: 194) と述べているように、英語史において、極めて重要な位置を占めている。即ち、東中部方言は、他の地域の方言からの影響を受け、それらの特徴を取り入れながら、今日の標準英語の母体として発達した言語であり、現代英語に残る北部方言の特徴もこの地域を通して入ってきたと考えられている。Yorkshire 出身の Richard Rolle の作品は、北部方言を代表し、北部方言で転写された MS Dd v 64 III (以下、Dd 写本) は、Rolle のオリジナルテキストに、方言上、最も近いと考えられる写本の一つである。Kubouchi (1991) は、Dd 写本所収の書簡体作品 *The Form of Living* におけるスカンディナヴィア借入語 (以下、Sc 借入語) と、Lt 写本中の対応語を調査し、東中部地域における Sc 借入語の分布傾向を明らかにしている。また、中世後期のデーロー地域における Sc 借入語の推移状況をより正確に示すための、さらなる語彙研究の必要性も指摘している³。

本論では、Rolle の真作とされている 5 篇の宗教抒情詩、(i) “Love is lif”, (ii) “Ihesu Goddis son”, (iii) “I sigh and sob”, (iv) “The ioy be euery dele”, (v) “Al synnes” (以下では、これらをまとめて lyrics と呼ぶ⁴) における Sc

借入語の分布を、Lt 写本と Dd 写本とで比較することで、東中部方言地域における Sc 借入語の推移について考察を進める⁵。方言研究の立場から、Sc 借入語の推移状況を観察するには、より広範囲な資料を通時的な視点で調査しなくてはならないが、本稿の調査結果によって、15世紀の東中部方言の中で、Sc 借入語がどの程度受容されていたのかに関して、一定の傾向を見て取ることが出来ると思われる。特に、現代では廃語となった、もしくは北部方言に限定される語と、現代の標準英語に生き残る語とを区別して考察することで、標準英語への動きという観点からの調査の足掛かりとすることが本論の目的である。

2

Dd 写本で用いられた Sc 借入語のうち、廃語となる、或いは現代では北部地域にのみ限定され、標準英語には見られない語彙の考察から始める。表1は、Dd 写本に起こり、現代の標準英語に生き残る Sc 借入語と、それらの Lt 写本での対応語及び対応箇所を示している⁶。表の「(i) 1*」は、その語が、Lt 写本中の (i) “Love is lif” の1行目に起こることを意味し、「*」は、その語が脚韻、或いは中間韻の位置にあることを示す⁷。

表1：現代の標準英語に残らない Sc 借入語

Dd 写本中の Sc 借入語	語 源	MS Longleat 29の対応語と対応箇所
Ai (c1200-1826)	[ON ei]	ay (i) 1*, (iii) 25*, 27*, aye (i) 60*, (ii) 24*, (iv) 3*/euer [OE æfre] (i) 14, 25, 20, (iii) 2, (iv) 39, 45, 53, 75, 96
Boun(e) (?c1200-1866)	[ON búin-n, bún-]	boweth (iii) 13
Dregh (c1200-1866)	[ON drjúg-r]	dregh (i) 12*
Garre (a1200-1894)	[ON gøra]	make [OE macian] (ii) 14, may [OE mæg] (i) 26
Hethen (c1200-?a1500)	[ON héðan]	hethen (i) 17
Intil (1258-1893)	[OE inn + ON til]	in to [OE inn tō] (i) 3 (2×), 9, 16, 21, (ii) 4, (iii) 4, 26, to [OE tō] (iv) 67
Mirke (a1000-1904)	[OE myrce, ON myrk-r]	derkenesse [OE deorcnes] (i) 64

Qwart (a1300-1559)	[ON kvirt]	quert (i) 15*, (ii) 18*, (iv) 15*
Sloken (a1300-1871)	[ON slokna]	quenchen [OE ācwencan] (i) 6
Tyne (c1250-1866)	[ON týna]	tyne (i) 52*
Wandreth (1175-1680)	[ON vand-ræði]	wandrynge (i) 19
Wane (a1225-a1650)	[?ON ván]	wone (i) 55*

表1のうち、Lt写本で保持されたSc借入語は、ay, dregh, hethen, quart, tyne, waneであるが、注目すべきことは、hethen以外は全て、脚韻、もしくは中間韻の位置にあるという点である。

- Longleat (i) 1 Love is lif þat lasteth *ay*, þer hit in Crist is feste;
Whan wel ne wo hit chaunge may, as written hath men wisest;
- Longleat (i) 11 The bed of blisse hit goth ful negh, I tel þe as I can;
þegh vs þynke þe wey be *dregh*, loue so[u]pileth God and man.
- Longleat (i) 15 Loue vs couereth and maketh in *quert* and lifteth to heuyn-rike;
Loue rauyssheth Crist in to oure hert; I wot no lust hit lyke.
- Longleat (i) 51 Loue is a gostly wyne, þat maketh bigge and bolde;
Of loue no thyng shal *tyne* þat hit in hert wil holde.
- Longleat (i) 55 In loue be our lyuyng, I wote no bettyre *wone*;
For me and my louyng, loue maketh both be one.

脚韻の影響は、特に ay の場合に顕著である。ay は Dd 写本に14例あるが、そのうち脚韻、あるいは中間韻の位置に現れる6例は、全て Lt 写本でも保持されるが、残る8例は、ay と競合する本来語である euer に置き換えられる。即ち、ay の使用は脚韻の要請がある場合に限定され、語彙選択は完全に脚韻に依拠する。加えて、散文 *The Form of Living* (Lt 写本) では、ay は、散文に挿入された韻文中で、脚韻語として使われる例が1例あるだけで (*The Form of Living* 605)、それ以外では一貫して euer が使われる (Kubouchi 1991: 324)。従って、Lt 写本の写字生は、ay の使用を避け、脚韻の要請がなければ使用しないと言える。同じことは、tyne ‘tine, lose’ についても言える。

Dd 写本の *The Form of Living* では、*tyne* は 5 例あり、Lt 写本の対応箇所では、全て *lese* (< OE *lēosan*) に置き換えられているのに対し、*lyrics* では、中間韻の位置にあるため、保持される。

一方で、表 1 の Sc 借入語のうち、脚韻語ではない *garre*, *intil*, *mirke*, *sloken*, *wandreth* は、Lt 写本では、全て本来語に置き換えられる。これらのうち、*garre*, *intil*, *sloken* に対する、Lt 写本の *make*, *into*, *quenchen* は、写本間の方言的特徴を示すに過ぎない。しかしながら、*mirke*, *wandreth* が、Lt 写本で *derk*, *wandrynge* に言い換えられたことは、オリジナルの読みにならず影響を与えており、この語彙に対する写字生の馴染みの薄さを特に窺わせる。*myrknes* は、Dd 写本では、*mede* と頭韻を成立させているが、Lt 写本では、*derkenesse* に直されたため、頭韻が成立しなくなる。

Longleat (i) 64 *Þay shal sit helle within, and derkenesse haue to mede*
Dd *Þay sal sytt hel within, and myrknes haue to mede*

Dd 写本で *wandreth* ‘suffering’ が使われる箇所は、Rolle 自身のラテン語の著作である *Incendium Amoris* (「愛の火」) に基づく。そして、Dd 写本の *wandreth* は、*Incendium Amoris* の *aduersitate et miseria* の訳語であるから、Dd 写本の *wandreth* という読みがオリジナルであることは明らかである⁸。

Longleat (i) 19 *Loke þi hert fro hym nat twyn, þogh þou in wandrynge ware*
Dd *Loke þi hert fra hym noght twyn, if þou in wandreth ware*⁹
Incendium *Unde neque cor tuum ab ipso separetur, quamquam in aduersitate et miseria positus fueris*

以上の考察から、標準英語に残らない Sc 借入語は、15世紀の東中部方言の中で、避けられる傾向にあり、脚韻の要請がない限り、使われてはいないと結論付けられる。

3

次に、現代の標準英語に残る語について見る。表 2 から、殆どの語が、脚韻の要請の有無に関わらず、Lt 写本で用いられているのが分かる。例外として、*lifte* が、本来語の *set* に置き換えられることがある。

Longleat(i)9 The sete of loue is *set* ful hegh, for in to heuyn hit ran;
 Dd Þe sette of lufe es *lyft* hee, for intil heven it ranne.

ただし、*lifte* 自体は、Lt 写本の *The Form of Living* で一般的に用いられている。また、*lifte* ‘raise’ と *set* ‘place’ は、同義語とは言い難く、この書き換えは、調べた限りでは起こらない。従って、写字生は、方言上の理由で *set* を用いたのではなく、*set* を用いたことで、先行する *sete* との頭韻が成立するため、頭韻を意識して語彙を選択したと考えられる。

表 2：現代の標準英語に残る Sc 借入語

Dd 写本中の Sc 借入語	語 源	MS Longleat 29 の対応語と対応箇所
Ar(e) (a950-)	[OE. (Nth.) aron]	ben (i) 60, (iv) 61
Bigge (c1300-)	[perh. of Norse origin]	bigge (i) 51
Bob (e) (a1131-[MED])	[ON báði-r]	both (i) 56, (iii) 1, bothe (ii) 10, omitted (iv) 43, (i) 66
Bren (c825-)	[ON brenna]	brent (ii) 27*
Brest(e) (a1000-)	[OE berstan, ON bresta]	brest (iii) 13*
Calle(e) (a1100-)	[ON kalla]	calle (iv) 95*
Cast(e) (c1225-)	[ON kasta]	casten (i) 60, kasten (ii) 46, cast (iv) 5, 73, kastynge (v) 1
Deye (c1135-)	[ON deyja]	deye (v) 16*
Ill (?c1150-[MED])	[ON ill-r]	ille (i) 31*, (v) 2*, il (v) 10
Kyndel (c1200-)	[ON kynda]	kyndel (ii) 11, (iv) 97
Law(e) (a1000-)	[ON lág-r]	logh (ii) 42, low (v) 13
Lifte (?c1200-[MED])	[ON lyfta]	set [OE settan] (i) 9, lifteth (i) 15
Meke (c1200-)	[ON mjúk-r]	meke (ii) 10, -est (iii) 6, -nes (iv) 29*

Seme (n) (a1200-)	[ON sóma]	semed (v) 20*
Skill (c1200-)	[ON skill]	skylle (ii) 14*, (iv) 57*, (v) 1*
Sle (c950- [MED])	[ON slæg-r]	slegh (i) 10*
Take (n) (c1100-)	[ON taka]	take (i) 27, (ii) 4, (iv) 22, 102, tak (ii) 12, 19, (iv) 105, tane (i) 53*, (v) 3, too (iv) 56*, betake (iv) 50*
Til (prep.) (a800-)	[OE (rare Nth.) til; ON til]	tille (i) 30*, 60, (ii) 16*, 30, (iv) 56 (with Dd), 58*, (v) 3*/in to [OE inn tō] (ii) 32, (iii) 4, to [OE tō] (i) 6, 15, 18, 22, 33, 35, 67, (ii) 8, 23, 46, 48, (iii) 23, 25, (iv) 14, 61, 77, 88, 100 (v) 4, 19, omitted (iv) 50
Til (conj.) (1154-)	[OE (rare Nth.) til; ON til]	Til (ii) 23
Trayst (a1225-)	[ON traust-r]	trusty (i) 41, tristy (iv) 81,
Traist (e) (a1225-)	[ON treysta]	No correspondence (i) 68
Ʒai (c1200-)	[ON Ʒei-r]	Ʒay (i) 63, (v) 7, 8, Ʒey (ii) 34, (iv) 99, (v) 10, Ʒey (i) 60, thay (iv) 61, 62
Ʒaym (e) (c975-)	[ON Ʒeim]	ham [OE heom] (iv) 62, 100, (v) 8
Ʒair (e) (?a1100-)	[ON Ʒeira]	har [OE heora] (i) 59 (2×), (i) 63, (iv) 63, 100, (v) 16, hare (i) 62, thar (iv) 62,
Ʒof (c1200-)	[ON Ʒó]	Ʒegh (i) 12, Ʒogh (iii) 7

表2から、標準英語の中で生き残った語彙は、15世紀に東中部地域で受容され、一般化されていたと言える。ただし、三人称複数 *be* 動詞としては、*ben* が使用される¹⁰。また、複数代名詞の属格、与格としても、古英語以来の *ham*, *har* が使用されるが、1例だけ *thar* が起こる。つまり、閉鎖類に属する語彙は、使われることがあるものの、まだ定着していない。

前置詞 *til* の場合、意味機能が多岐に渡るなので、その点を踏まえた調査が必要だが、*lyrics* での使用状況から次のことは分かる。Lt 写本での意味は限定的であり、同義語で、英語本来の *to* がより好まれる。Dd 写本で29例ある *til* のうち、Lt 写本では、22例が *to* (または、*in to*) に書き換えられるので、*til* は *to* よりも頻度が低い。加えて、Lt 写本中の7例の *til* のうち、脚韻に使用

された語が4例あるということは、脚韻の要請に合わせて使う率が高く、脚韻語でなければ、to に変えられた可能性は極めて高い。事実、脚韻位置にある4例のうち、3例は、come に後続し、「場所」を意味するのだが¹¹、Mustanoja (1960: 408-409) によれば、「場所」の意味は、主として北部に限られ、中部・南部方言では稀である。実際、Lt 写本の lyrics では、脚韻位置以外で、「場所」を表す til は確認出来ない。

4

MS Longleat 29所収の Richard Rolle の lyrics の考察から、15世紀の東中部方言地域における、Sc 借入語の使用に関して次のようにまとめられる。

1. 現代の標準英語に残る Sc 借入語のうち、開放類に属する語は、ほとんどが定着している。
2. 複数代名詞の their, them、及び be 動詞の are といった閉鎖類に属する語は、一般的には使用されず、殆どが本来語に書き換えられる。
3. 廃語となった語、もしくは現代では北部地域に限定される Sc 借入語は、脚韻の要請があれば使われるが、そうでなければ別の語に書き換えられる。

本論の資料は限られているが、Lt 写本における Sc 借入語使用の状況は、東中部地域における同時代あるいはその前後の時代の写本での Sc 借入語と合わせて見ることで、標準英語が確立していく段階で、Sc 借入語が受容される過程について考察を進めていくことが可能になるのではないと思われる。Richard Rolle の言語については、特に、文構造、語順、文体的技巧の面での先行研究が既にあるが¹²、主に Dd 写本の読みに基づく研究であり、異写本へ調査を広げることの必要性が指摘されてはいるものの¹³、未調査の点も多い¹⁴。とりわけ、Sc 借入語に関しては、Serjeantson (1935: 98) が、Dd 写本の書簡体作品3篇を調査し¹⁵、Rolle の作品には、Sc 借入語が多く用いられている、と指摘しているが、異写本での Sc 借入語の使用状況、及び、Sc 借入語と本来語との競合の状況についての包括的な調査は、まだされていないと思われる。

Ogilvie-Thomson は、Lt 写本を底本とする刊本の中で¹⁶、Allen (1931) が底本とした Dd 写本ではなく、東中部方言で転写された Lt 写本を、Rolle の

オリジナルテキストとみなすことを主張している¹⁷。確かに、Lt 写本は、Rolle のオリジナルを復元するという目的にとって重要な写本であるが、加えて、標準英語確立に焦点を当てた方言研究においても、意義があると言えるのではないか。即ち、Rolle のテキストが北部地域から他方言の地域へと普及していく経過を辿ることによって¹⁸、それと並行して、Sc 借入語が標準英語の中で受容され、定着していく過程を明示することが可能になると思われるが、これについては、本稿の調査報告を元に考察を広げ、稿を改めることにしたい。

注

- ¹ Ogilvie-Thomson (1988: xvi-xvii) によれば、Rolle の英語による著作は、56種の写本に収められている。
- ² “The sum of these features points to the standard fifteenth-century literary language based on the East Midland dialect(s), with a sprinkling of South-Eastern forms” (xxxv).
- ³ Kubouchi (1991: 329) 参照。
- ⁴ タイトルは、Ogilvie-Thomson (lxxxi-lxxxv) に従う。これら5篇の lyrics の Lt 写本と Dd 写本での対応関係は、以下の通りである。(Dd 写本でのタイトルは、Allen (1931) がそれぞれの lyrics につけたものである。)

Longleat 29	ULC Dd v 64 III
(i) “Love is lif”	“A Song of the Love of Jesus” (ll. 1-68)
(ii) “Ihesu Goddis son”	“A Song of Love-longing to Jesus”
(iii) “I sigh and sob”	“A Song of the Love of Jesus” (ll. 69-96)
(iv) “The ioy be euery dele” (ll. 1-48)	“The Joy be in the Love of Jesus”
(iv) “The ioy be euery dele” (ll. 49-108)	“The Nature of Love”
(v) “Al synnes”	“Exhortation”

Lt 写本所収の (iv) “The ioy be euery dele” 中、第3スタンザ (ll. 1-8)、第5スタンザ (ll. 13-16)、第9スタンザ (ll. 21-33) は、Dd 写本では欠落している。なお、Longleat 29は、(v) “Al synnes” に続けて、(vi) “Ihesu swete” という韻文を所収している。これは、Dd 写本では所収されていないので本稿では扱わない。

- ⁵ Lt 写本の読みは、Ogilvie-Thomson (1988)、Dd 写本の読みは、Allen (1931) から引用する。
- ⁶ 表1、表2の Sc 借入語、及び、その起源は、Sisam (1971) の Glossary の見出し語と語源の記載に基づくものである。初例、最終例は、原則として OED の引用例に

基づくが、*MED* が挙げている初例がより早い場合には、それを記入した。

- ⁷ Olszewska (1935) は、Sc 借入語には、広く一般的に使われていたものと、実例が非常に少ないものがあり、後者として、*Metrical Homilies*、*Cursor Mundi*、*Ormulum* には、他のテキストに例のない語彙が起こることを指摘しているが、Rolle の lyrics で使われている Sc 借入語は、Rolle による散文、もしくは Rolle 以外の作品にも実例があり、比較的頻度の高い語を使用している。従って、東中部方言の写字生にとって馴染みのない語彙はさほど多くはないと推測される。
- ⁸ (i) “Love is lif” の原典 *Incendium Amoris* については、Wilson (1959) を参照。
- ⁹ 「たとえ苦難を受けているときでも、あなたの心が神から離れないようにしなさい。」
- ¹⁰ ar(e) を古ノルド語の影響によるものとする見方については、Samuels (1985) を参照。
- ¹¹ Longleat (i) 30, (ii) 16, (iv) 58.
- ¹² 例えば、Gordon (1966)、久保内 (1981)、真鍋 (1983) などがある。
- ¹³ 例えば、久保内 (1981: 221-22) は、「13世紀前半の West Midland 方言、14世紀前半の北部方言、14世紀末期の East Midland 方言というそれらの作品間の方言的差異、それに対する当時の各 scriptorium における写本作業において典範とされた所謂標準的文語の存在の問題等未だ多くの問題が残される」と指摘している。
- ¹⁴ 独立節における S-O-V 型語順 (文体的に marked な語順) の異写本間での分布については、久保内 (1977) を参照。
- ¹⁵ *The Form of Living, Ego Domino, Commandment of Love.*
- ¹⁶ Ogilvie-Thomson が、「The aim of this edition has been to restore Rolle's original text as nearly as is possible in an alien dialect” (p. xcv) と述べているように、この校定本は Rolle のオリジナルを提供することを目的にしている。
- ¹⁷ これには写本の方言による問題が無いわけではなく、その点が問題視されている。例えば、Jack は、“... the form or style of the works may occasionally be impaired by the 'alien dialect' [East Midland] in which they appear” (1990: 163) と述べ、方言が異なるため、Lt 写本のテキストでは、Rolle のオリジナルのスタイルが損なわれる可能性を危惧している。Lt 写本をオリジナルとみなすことの是非に関しては、Frankis (1990), Wenzel (1990), McGeer (1991) 等を参照。
- ¹⁸ Rolle 作品の chronology と authorship についての、比較的最近の研究として、Watson (1991) が挙げられる。

参考文献

一次文献

- Allen, Hope Emily, ed. *English Writings of Richard Rolle, Hermit of Hampole*. Oxford: Clarendon, 1931.
- Deanesly, Margaret, ed. *Incendium Amoris*. London: Manchester UP, 1915.

Ogilvie-Thomson, S. J., ed. *Richard Rolle: Prose and Verse*. EETS os 293. Oxford: Oxford UP, 1988.

Sisam, Kenneth, ed. *Fourteenth Century Verse and Prose*. Oxford: Clarendon, 1970.

二次文献

Baugh, Albert C. and Thomas Cable. *A History of the English Language*. 5th ed. London: Routledge, 2002.

Frankis, John. "Review of Ogilvie-Thomson (*Prose and Verse*)."
The Review of English Studies 41 (1990): 547-48.

Gordon, Ian. A. *The Movement of English Prose*. London: Longman, 1966.

Jack, George. "Review of Ogilvie-Thomson (*Prose and Verse*)."
English Studies 71 (1990): 163.

Kubouchi, Tadao. "Scandinavian Elements in Rolle's *Form of Living* in MSS ULC Dd v 64 III and Longleat 29." *Studies in English Philology in Honour of Shigeru Ono*. Ed. Koichi Jin et al, Tokyo: Nan'un-do, 1990. 317-30. Rpt. in his *From Wulfstan to Richard Rolle: Papers Exploring the Continuity of English Prose*. Cambridge: D.S. Brewer, 1999. 63-74.

Kurath, Hans, Sherman M. Kuhn, and Robert, E. Lewis, eds. *Middle English Dictionary*. Ann Arbor: U of Michigan P, 1952-2001.

McGeer, Rosemarie. "Review of Ogilvie-Thomson (*Prose and Verse*)."
Speculum 66 (1991): 942-44.

McIntosh, Angus. "Middle English Word-Geography: Its Potential Role in the Study of the Long-Term Impact of the Scandinavian Settlements upon English." *Middle English Dialectology: Essays on Some Principles and Problems*. By Angus McIntosh, M. L. Samuels, and Margaret Laing. Ed. Margaret Laing, Aberdeen: Aberdeen UP, 1989. 98-105.

Mustanoja, Tauno. *A Middle English Syntax*. Part I. Helsinki: Société Néophilologique, 1960.

Olszewska, E. S. "Types of Norse Borrowing in Middle English." *Saga-book of the Viking Society for Northern Research* 11 (1935): 153-60.

Samuels, M. L. "The Great Scandinavian Belt." *Current Issues in Linguistic Theory* 41 (1985): 269-81. Rpt. in *Middle English Dialectology: Essays on Some Principles and Problems*. By Angus McIntosh, M. L. Samuels, and Margaret Laing. Ed. Margaret Laing, Aberdeen: Aberdeen UP, 1989. 106-115.

Serjeantson, Mary S. *A History of Foreign Words in English*. London: Kegan Paul, Trench, Trubner, 1935.

Simpson, J. A. and E. S. C. Weiner, eds. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 20 vols. Oxford: Clarendon, 1989.

Watson, Nicholas. *Richard Rolle and the Invention of Authority*. Cambridge: Cambridge

UP, 1991.

Wenzel, Siegfried. "Review of Ogilvie-Thomson (*Prose and Verse*)." *Notes and Queries* 235 (1990): 73-74.

Wilson, Sarah. "The Longleat Version of 'Love is Life.'" *Review of English Studies* 40 (1959): 337-46.

久保内端郎「Richard Rolle の英文書簡体と S-O-V 型の語順」、『言語文化』(第15号、1978): 75-82。

——. 「Richard Rolle の "Epistles" における語順について」、寺澤芳雄編『英語の歴史と構造：宮部菊男教授還暦記念論文集』、研究社、1981、211-35。

真鍋和瑞『中世の英語散文とその文体』、開文社、1983。